

移動している辺境

孫 歌
(中国社会科学院)

じゃあさっそく本題に入ります。今まで、私は朝鮮半島のことを考えるときに、基本的に三つの視座を持っていました。そしてこの三つの視座は、それぞれ三つの空間に対応をしております。一つ目は韓国という空間に身を置いて朝鮮半島のことを考えること。その空間の中で見えてくるのは、まず分断体制ですね。ここで特に注目したいのは、私が毎回韓国に行くとき、朝鮮について得られた情報は変わってくるということです。一番最初の十何年前に行ったときは全く何も知らない状況から、今現在になってだいぶ変わってきました。例えば、ごく最近、韓国と朝鮮の国境に一番近い出版都市の坡州（パジュ）というところに行って、そこで聞いた話では、今、韓国と朝鮮で共通の鉄道を作ろうと、そういう南北会談は何回も開かれていたそうです。この会談は非常に困難なことです、最終的にどうなるかわかりませんが、もし実現できれば、その鉄道は今度、韓国と朝鮮の国境を超えて、ユーラシア大陸につなげていく。もちろん、南北問題はこれで解決できるというわけではないのですが、現実はこのようにひそかに動いています。これは韓国に身を置きながら見えてくる朝鮮半島のイメージですね。

二つ目は日本というこの空間に身を置いて朝鮮半島のことを見ることです。このときに、どうしても慰安婦問題とか在日韓国人、在日朝鮮人の問題が見えてくる。分断体制などの問題は恐らく副次的な問題になります。それから三つ目の視点もあります。それは中国東北の吉林省における北朝鮮につながる国境のそばの空間です。そこに身を置きながらもう一度朝鮮半島を見るときに、どうしても韓国は遠くなりまして、北朝鮮は目の前になるという空間感覚に変わるわけです。だから私は三つの視点を持ちながら、それを交代しながら重層的な朝鮮半島を見てきたわけです。

しかし、どう考えていても、もう一つの視点が欠落しているような気がします。それは北朝鮮の中に身を置いてこの朝鮮半島の問題を考えることです。残念ながら私には今でもそれを本格的に体験したことがありませんでした。とはいいながら、歴史が動いているので、恐らく

これからは徐々にその可能性が生じるだろうと信じております。

今回は私の朝鮮での初体験という一日の旅行記という話を持ってきました。もちろんこれは朝鮮社会の中に入ったほどの話にはならないです。一日の短い国境地域での観光でした。ガイドさんに誘導されながらいくつかのスポットだけを見学していて、そしてさっさと帰るかたちの旅行でしたけれども、それにしても今まで私の中にある朝鮮半島のイメージは少し更新しました。まだまだまった話にはならないですけども、一応簡単なかたちで皆さんにご報告をさせていただきます。

まず、この報告のタイトルについて、あとでまたもう一度説明しますが、「移動している辺境」というんですけど、正しくは移動している国境のはずなんです。だけれども、なぜ国境という言葉を使わなかったか、これはあとで説明します。

まず地図で説明します。これは中国の地図ですけど、私は行ったのはこのあたりですね。このあたりに、中国の朝鮮族の自治区があるんです、延辺（えんぺん）朝鮮族自治区、その中心都市は延辺市です。その延辺市に代表的な大学延辺大学があります。私はそこの朝鮮半島研究院という機関に招待されて、今年の6月に講演をしに行きました。そして彼らは非常に親切で、一日の朝鮮旅行までをご招待してくれました。二人の朝鮮族の先生は、連れ添って、一緒に朝鮮側の国境の街に観光にいきました。

さて、この延辺自治区には、琿春（こんしゅん）市という都市があって、その都市の端っこには防川村という小さな村があります。住民はいま、100人前後しかいないとのことですが、この村は今観光地としてとっても有名になってる。なぜかという、そこにはロシア、朝鮮、中国という三国の国境が互いに接している。だからそこで一つの展望台が建てられて、一目で三国が見られるという看板で観光客を集めているわけです。私は何年前に一度行ったことがありますので、今回は国境線へ向かいました。

その防川というところは三角形の頂点にあたるところで、こっち側には朝鮮になっていて、こっち側にはロシ

アになっている。朝鮮とロシアは防川の端っこでつながっている。かくして防川からはさらには前には進めないわけですね。ここを図門江という川が流れて、この川は直接に日本海につながります。防川あたりから海までには15キロしかないです。だけれども、この15キロの川の両側には中国の領土がありません。それはどういうことかということ、中国はここから船を出して日本海に入るためにはどうしても朝鮮かロシアか片方の許可を得なければならぬわけですね。しかし、昔、清朝の後半までには、実はこういう地図じゃありませんでした。そのときの琿春市は国境からかなり離れて、防川も国境線の傍ではなくて、このあたりが全部中国の領土でしたという。しかし、アヘン戦争のあと、ロシアからいろいろ圧力をかけて、屈折した経緯があって、こういうふうになったわけですね。とはいえ、日中戦争までに、中国の船がここから日本海に入るにはその許可が要りませんでした。中ロ不平等条約のなかには、中国の船の通行自由が禁止される条項がなかったわけですね。

ところが、その通行自由は、日中戦争によって奪われました。防川の西側に張鼓峰という山があって、もともとは中国領でしたが、1938年、つまり日中戦争全面的に爆発した翌年に、この山をめぐるロシア軍と日本軍は、いわゆる張鼓峰戦役を起こして、結局日本軍が負けました。そしたら、さらに国境線は、中国側に迫ってきて、防川は1938年以降に非常に孤立した地域になっていったんです。1938年以後、主に日本軍の占領で、図門江から日本海に入る海へのルートは、中国の漁民に閉ざされました。

かくして、防川に隣接したのは、片っ方が日本占領下の朝鮮で、片っ方がロシアで、その狭間において、住民たちは内陸に往来するときには、細い道一本しかない。そして、夏になれば大洪水がやってくると道が切断されてしまって防川は孤立した島になる。そうすれば、防川の人たちは、内陸にいくために、ロシアから道を借りることになります。だからロシア経由で中国人は移動をするわけですね。日本が敗戦してからも、その状況はほぼ変わらず、大体80年代まで続いて、その後、中国側は図門江にそって、石の堤を作って、洪水の氾濫を抑えまして、ロシアから道を借りるという歴史にやっと区切りをつけました。

これは展望台から撮った写真です。展望台から日本海の方へ見ると、図門江に跨る橋が見えます。この橋は昔ソ連と朝鮮、一緒に協力して作った、ロシアと朝鮮の国境を越える橋なんですね。鉄道橋です。汽車はここを

通るらしいんです、今でも。これはソ連という時期に作った橋です。



1, 展望台からみえた橋

さて、この張鼓峰事件のきっかけになったのは、実はスターリンの大虐殺です。スターリンは1930年代から内部の反対派を全部駆除するために非常に幅広く虐殺を行いまして、そのときに、一人のソ連の元将校は日本軍に投降しました。そして彼は亡命すると同時に、ソ連の極東での軍事秘密を日本軍に提供して、そのなかに、その張鼓峰という山でソ連軍は戦争を起こして、この山を占領しようとするという情報も提供されました。日本軍はすぐそのあたりの状況を偵察しようとしたが、偵察する軍人はソ連軍に見つけれ、スターリンは先手を打って戦争を起こしたという。このようないきさつがありました。しかし、もともとは、1858年の「中ロ璦琿条約」には、張鼓峰が中国領だったのですが、この戦役によって、ロシア領になったわけで、ここは国境線になっていったんですね。こうして、防川は孤立した地域になってしまいました。今、張鼓峰も観光のスポットの一つになっています。今日になってきて、国境は一応こういうふうになっています。そしてさらに移動することはほぼできない状況になっていて、防川から日本海には行けません。それはもうほとんど安定している現状です。

その一方、中国は市場経済化していて、そして観光旅行を通して、過去の戦場を観光地に転換するという事で、客観的に見れば、民たちの流動の条件を作りだしました。これで年におって観光客の数が増えてくるわけですね。朝鮮、ロシアにも、中国人が進出します。朝鮮とロシアに歓迎されたと思います。特に朝鮮のほうは、積極的に観光コースを作って、ツアーも少しずつ増えてくるのです。

さて、この図門江ですが、朝鮮語でいえば、豆満江（とうまんこう）というのですが、防川までにこの川を挟んで両側には中国と朝鮮があって、いち早く朝鮮側の豆満

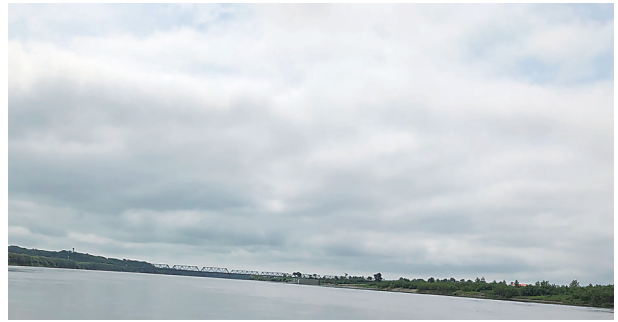
江沿岸の地域は豆満江貿易特区ができました。今、中国、ロシア、それから世界中のさまざまな貿易会社が入っています。これは中国の早い時期にできた深圳（しんせん）特区と似たような性質を持っています。それに合わせて国境線あたりで観光地区も作られているんです。旅行社によって観光客をまとめて中国側と朝鮮側のガイドをつけて、いくつかのスポットをみるという形での観光です。ほぼ世界中のどこにもみられるようなやり方です。2種類のツアーがあります。一つは日帰り旅行、もう一つは2泊3日旅行。私は日帰り旅行で行ってきました。それで、出国手続きと入国審査ということは、もちろんしなければならぬけれども、非常に簡単に済ませることで

す。それで、私たちは出国手続きのところに行きました。手続きが簡単ですが、関西空港と同じように、出国手続きのところは写真がとってはいけません。この写真は外からの写真です。



2. ボート乗り場

写真に写った後ろ姿のこの方は、伴ってくれた延辺大学の朝鮮族の先生で、彼女は入れば、出国係の人たちは全部、先生、いらっしゃいましたって歓声を上げたんです。なぜかという、彼女はずーっとその人たちに朝鮮語を教えている、とのこと。彼女はものすごく尊敬されていて、おかげで私も彼女の客として優遇されました。そこからボートに乗りました。これで、こっちから出発した。これはその川ですね。向かい側は朝鮮です。そして、まず、一目で3国が見えるところから見えた橋は、今、角度が変わりました。こういうふうに横になっているんです。私たちは今、川の真ん中です。実はこっちから向こうまでに3分間しかかからなかったんです。そして、朝鮮側に着きました。



図門江の真ん中から見えた橋

朝鮮側の入国手続きも簡単です。こちらがやや緊張しましたがけれども、向こうの係りの方は気楽に接してくれて、もう慣れた顔をしています。さっさと中に入って、向こうはすでにマイクロバスを用意していました。そして、結構走ってたっぷり見たのは朝鮮農村の風景です。一目でわかりますが、昔の中国の人民公社の組織はまだほとんど朝鮮に残っているようです。団体が畑仕事をしているんです。写真は撮っちゃいけないので、あんまり記録はできなかったけれども、農民たちはせせと働いている。懐かしい風景でした。自分の昔の経験を思い出して、そんな感じはしているんです。

水田の風景を見ながら、きれいなビーチに着いたのです。これは一番目の観光スポットです。日本海のそばですね。この海ははっきり言えば特徴がないですね。水はきれいだけでどこにもあるような海です。特徴があるのはここです。ここでは地元の朝鮮人は海の幸を販売しています。その場でも作ってくれて、その場で食べられます。結構ビールを飲みながら食べる観光客がいます。私も食べました。新鮮で美味しかったです。



朝鮮の海の幸

でも私は一番興味を感じたのは、朝鮮の人はちっとも愚かではなことです。彼らの海の幸の値段はばかばかし

いほど高い。

会場 (笑)

そして、これは汚染されてないよと、われわれに対してお説教をして、われわれは汚染のひどい国の国民ですからさすがに後ろめたさがあって、まあ、高くてもいいんだって、あつという間にいろんなものが売り切れたらしいんです。

考えて見れば、どの国のメディアにおいても朝鮮についての宣伝は非常にステレオタイプ化したものです。というより、朝鮮国家の行為以外に、ほとんどなににも報道されていないですね。厳しい国だ、という貧弱なイメージだけがあります。たしかに、厳しいところがあります。たとえば、いまは朝鮮旅行が出来るようになってから、ほかの国にいくときと違って、中国の観光ガイドの説明書には、指定されたところ以外に、勝手に写真を取るな、という注意も書かれています。しかし、その程度のことなら、別に気にしなくてもいいと思いますよ。そのうちに変わりますから。それより、朝鮮社会の肝心なところは、われわれは日ごろのメディアの報道から得られないですよ。朝鮮の民はどう生きているのか、ということは、まったく見えてこないわけです。要するに、民不在というようなイメージでした。

ところが、実際に朝鮮の方々に接してみれば、決してそのような貧弱なイメージではないのですよ。民の息吹を感じております。朝鮮人は、自分なりに生活を営んでいる、という実感が非常に得られました。われわれと同じような人間は、向こうで生き生きとして生活を営んでいます。朝鮮側のガイドさんは大体平壤(ピョンヤン)大学の中国語学科の卒業生で、非常に丁寧に接してくれて、そして、中国語もとてもお上手です。たしかにガイドさんは二人一組というような行動パターンですが、ときどき離れて行動しているので、決して互いに厳しく監視しあうような感じがしていないのです。

次のスポットは小さな山に登って、歴史上のある戦争を記念する石碑を見学しましたが、ガイドさんはほとんど何も説明してくれませんでしたので、さっさと見て降りました。下には売店が並んでいて、今度は海の幸じゃなくて、漢方薬です。店員さんはきれいな中国語で、これはお国の同仁堂の漢方薬よりはるかに質がいいんだ。お国の漢方薬は偽物で作ってはいらんだけど、こっちは本物だよ。これは高血圧によく効く漢方薬らしいん

です。私はそういう病気がないから興味がなかったのですが。

三つ目のスポットですが、今度、あの遠くから見た橋のこっち側に来ました。ここは、朝鮮とロシアの国境線でもありますね。ガイドさんに言われたのは、ここから先へは行っちゃいけない、と。兵隊さんは橋の入り口のところに立ってはいらんだけど、非常に優しい笑顔で私たちを迎えて、朝鮮族の先生たちと話し合いました。たぶん、一人ですーっと退屈だったんですからね。

会場 (笑)

観光はほとんどこれですべてです。もしただの観光者だったらつまらない旅行だったに違いないですけども、私にとっては非常に収穫の豊かな旅行でした。朝鮮の「民」の発見という大げさの話ではないのですが、朝鮮人の日常生活を想像するための実感が得られました。私には予備知識がそれほど持っていないのですが、このあたり国境線の移動という歴史を初歩的に知っていれば、やはりこの旅行は感無量な旅となりました。特に中国の領土においては近づけないこの鉄道橋を見たときに、ああ、実物はこういうものか、という感覚は特別でした。この旅行の後に何ヶ月たって、韓国の坡州で南北朝鮮は鉄道を作る、ユーラシア大陸につなげていこうという話を聞いたら、私が即座に反応したのは、じゃあもしかしてあそこを通るだろうと。もちろん、その鉄道はいつ作れるか、どこに通るかについて、まったく見当がつかないのですが、すくなくとも、このような現場での体験をもって、すぐに連想できるということ自体は、私にとって大切なのです。身をもってなじまない社会を実感するということは、偏見とステレオタイプ化された発想を防ぐためのもっとも大事な手続きだと思います。思想史研究においては、観念で動く誘惑が強いわけです。特に政治的正しさに頼って空理空論でやり取りすることになりやすいです。なので、私にはこのようなささやかな実感が大切なんです。

最後になりました、非常に感動的な場面をご紹介します。お昼の後に、サービスとしてガイドさんたちは歌手に変身して、きれいな声で歌ってくれました。ほとんど朝鮮の歌でしたので、私にはその歌詞がわかりませんが、きれいな曲とそのリズムに惹かれました。そして徐々に観光客(恐らく中国の朝鮮族の方々が多い)は、舞台上に上り始めたんです。最初は彼らはただ歌手たちの写真を撮っているんですね。そしてそのうちに踊りだしたんで

す。そうすれば会場の雰囲気はすーごく熱烈になって、みんなで、団欒した気分で歌ったり踊ったりして楽しかったです。



歌っているガイドさんと踊っている観光客

この交歓は三十分前後続いて、そして最後にある朝鮮の歌手は、きれいな中国語で挨拶してくれました。「中国の公民、最後の一曲はあなた方の平安を祈ってお歌います」と。そして中国の歌を中国語で歌いました。この歌は毎年旧正月の年越し番組「春節聯歡晚会」（日本の紅白にあたるもの）の最後で必ず唄われる締め曲です。曲名は「あなたの平安を祈る」で、中身は平安な毎日を過ごそうという祝福ですが、百姓の心にもっとも訴える曲です。そして、その場にいる中国人たちも一緒に歌いました。民にはもっとも大切なのは平和なんだ、という雰囲気がよく味わいました。最後に、観光客とガイドさんたちは一緒に記念写真を撮りました。これはきわめて感動的な場面でしたよね。



民の団欒

そして、朝鮮を出国したときに、川端へいく橋のところに立っているハンサムの朝鮮兵から一言、中国語で挨拶されました。お気持ちはいかがでしたか、と。私は、とってもよかったよと答えました。そのとき、彼の笑顔は非常に自然なもので、この話は恐らく、彼が勝手に私

にかけたと思います。それから、最後の1枚の写真。これは延辺に戻ってから行った市場です。延辺市には今、半数以上の住民は朝鮮族の方です。



延辺の市場

南北朝鮮との関係は三角関係になっております。つまり、国際状況の変動によって、朝鮮族は三角の頂点に立っているか、片っ方に落ちているか、あるいは逆三角の一番下にあるか、時代に応じてその位置づけは変わるわけです。韓国はいつでも頂点に立っているとは限らないです。そういう関係で朝鮮族の人たちは今、自分の生活を営んでおります。そして私はこの市場で非常に安い値段で朝鮮から輸入したサクラエビを買いました。ああ、朝鮮で買わなくてよかったなーと。もっとも向こうのビーチの臨時売店でこのサクラエビも売っていなかったけどね。

会場（笑）

最後に、まとめとして、なぜ辺境という話になるかを説明します。確かに防川というところに行けば、国境は歴史的にこういうふうに移動していた、それは実感ができます。そして、その移動によって民たちは自分の生活様式も変えていく、そういうことも想像によって実感できます。しかし、と同時に、国境というのは、ほとんどの国にとっても同じように、国境は必ず辺境なんですね。端っこにある。中心ではないです。辺境は非常に注目される時期はほぼ戦争期か、あるいは何かトラブルが起きたときです。それはいずれも短い間のことです。そして安定すれば辺境は文字通り、辺境になります。中心から離れて、誰も気づかないところになります。しかし、

もし私たちは視点を変えて考えれば、辺境ほど自由なところがないかもしれません。中心部にいる人間は、しばしばその中心部でしか作れないようなイデオロギーに翻弄されています。しかし、辺境にいくほどいろんな難しい現実的な問題にぶつかるときに、自分の知恵で解決しないといけないから、そうやっている間にその住民は内側と外側の両方の情報を自分なりに処理しながら生きていけるようになります。だから彼らをそんなにイデオロギー的にコントロールできない。そのところは私の今回の旅行の一番大きな収穫でした。民衆視座というのはこの頃よくいろんな研究の中でいわれてきていたけれども、この辺境で私の感じている民衆視点というのは、やや違う色に染められている。それは、国境にしても国家にしても、すべて自分の利用する対象になっていて、そしてどんな厳しい状況の中でも生きていくためにそれなりの知恵でいろんな不利な条件を逆手に取って、有利に転じさせるというのは民の生き方なんです。そこから私たち研究者は何が学べるかというのは、今の段階では結論として出せないけれども、でも、非常に考えさせられたことです。以上です。どうもありがとうございました。